

悦楽のテーマパーク4

ナイトメア・エクस्प्रेसツアー

体験版

作・@1039

登場人物

しいな みお

椎名 未央

フィオと拓海の娘でありミトと双子の姉妹。父親のことを知らず育つが、無邪気で澆刺とした明るいボーイッシュな少女。母親によって半ば強引にアイドルにされ、気づけば、かつての母親たちのように国民的な人気アイドルとなる。

動きやすいボブカットが似合っていたが、ミトの性転換がばれないように入れ替わるため、姉の髪を元にした特殊なエクステでロングヘアになり、ポニーテールにしている。肌は透けるように白く瞳はルビーのように赤い。身長は140センチと低いが、母に似てスレンダーな身体に発育が楽しみな柔らかな膨らみを既に見せている。

生命エネルギーを燃焼させ炎を起こすフレアラビットを演じ、真紅のバニーコスチュームで戦う。

しいな みと

椎名 海斗

ミオの双子の姉。妹と違い気弱で大人しい性格。元々は男の子だったが、タワ！オプナイトメアで性別を換えられてしまい、なぜか妹よりも胸が発育し、女の子らしい体つきにな

った。長く綺麗なブロンドを切ってボブカットにしている。瞳はエメラルドグリーン。学校でも元々、女の子っぽい性格と愛らしい容姿で女子と仲良しな上に密かに男子にも人気あった。半ば無理矢理、女の子としてアイドルグループ、ラ・ビットに入れられるが、元々が女の子っぽいので学校でも世間的にも普通に受け入れられてしまう。名実共に美少女アイドルとなったが、ほとんど違和感はない。植物の生命エネルギーを操作できるアースラビットを演じる。

こみや まきな

小宮 真希鳴

漆黒のストレートヘアを優雅にきらめかせるクールな少女。物静かで背が高いので同い年でもお姉さんの雰囲気がある。ただし、ミオとはなぜかライバル心を燃やし喧嘩をするが、ミトとは気が合うようで仲が良い。

ミナたちと一緒にラビットの一員となるが、実はキメラ遺伝子を狙うヴァーミリオン社の手先でナイトメアの息子であるクロウと小園内ミナの娘。本名はマキナ・ゾディアック。

ふたなり体質だったが、父親の裏切りによって騙していたはずのミオたちと一緒に陵辱を受け、男性器を奪われて完全な女の子となる。

ミトとミオ、双方から異性愛とも同性愛ともつかない恋愛感情を持たれ、真希鳴自身も2人を同様に愛するようになる。

生命エネルギーを静め、凍結もさせることができるスノウラビットを演じる。

椎名ファイオレッタ

かつて腹違いの姉ミナとアリス ナイト ラビリンズというバンドを組み、シャイニング・ラビットという特撮ヒロインも演じていた元アイドル歌手。キメラ遺伝子を狙う組織から逃れ、日本で芸能事務所アリスプロダクションを経営しながら社長である拓海と姉妹たちを探している。

地面に着きそうなほど長いブロンドがまるで金糸のように煌き、くびれたウエストと丸く柔らかなヒップ、なによりこぼれ落ちそうなほどの美巨乳を持つ。

小園内ミナ

黒いバニーガールコスチュームの特撮ヒロイン、ナイトラビットを演じて子供から大人まで国民的な人気を得た絶世の美少女アイドルだったが、父親であるナイトメアことシルバー・ゾディアックの陰謀に巻き込まれ、数奇で凄絶な運命を辿り、ナイトメア ワールドで消息を絶つ。

腹違いの兄であり、恋人の拓海の弟であるクロウとの間に子供を産んでいた。ナイトメアによって、麻衣香と共にキメラ遺伝子を持つ子供を産まされているらしい。

こみや　くろう

小宮 九朗

通称クロちゃんと呼ばれる、ちよっとお調子者だが頼れるミナたちのマネージャーであり、小宮万丈の義理の息子としてフィオレッタと共に働いていた。

本名はクロウゾディアックであり、ナイトメア、シルバー・ゾディアックの息子。父親の忠実な僕であり、ラビットとフィオレッタをタワー・オブ・ナイトメアに誘い、陵辱の罠に陥れる。ミナに産ませた真希鳴ですら、その陵辱の餌食とする残忍な快樂主義者。

ありま　たくみ

有馬 拓海

事務所の社長であり、ミナ、フィオ、麻衣香とは同じキメラ遺伝子を持つ異母兄妹。現在はミナたちと共に消息不明。

ありま　みねお

有馬 峰雄

銀狼と恐れられた銀髪の凄腕実業家であり、現在は新たにヴァーミリオン社の経営者としてシルバー・ゾディアックを名乗っている。その裏で自らの身体に宿るキメラ遺伝子を研究させ、新たな人類を作ろうとしている。

プロローグ 悪夢への特急券

かつて一世を風靡した特撮番組ナイトラビット。バニーガールのようなコスチュームに変身した美少女が闇を駆け、怪人たちを倒していくという変身ヒロイン物としては普通なのだが、清纯派アイドルとして国民的な人気を博していた小園内ミナが、ちょっとエッチな衣装でスタントマンも使わず派手なアクションに体当たりで挑んでおり、子供から大人まで男女を問わず注目を集めていたのだ。

そんなナイトラビットが十数年ぶりに復活した。ラ・ビットというアイドルユニットを組んだ、ブロンドボブがよく似合う活発な椎名ミオと、ブロンドの長い髪で女の子にしか見えない女装少年、椎名ミトの双子兄妹、そしてクールな黒髪清纯派美少女、小宮真希鳴という3人娘が、新たなナイトラビットとしてスーパーヒーローを演じることになったのだ。

ウサ耳にセクシーなバニーコート、可愛らしいチエックのスカートとネクタイというバニーガールと制服を合わせたような衣装は先代のナイトラビットのパートナー、シャイニングラビットに倣っている。

ブロンドボブカットのミオは炎を操るフレアラビットとして赤い衣装をまとい、ミトは大地の力を操るアースラビットとしてグリーン衣装、真希鳴はスノウラビットとして白い衣装を身に着け、復活した悪夢の王ナイトメアを倒すために激しい戦いに挑む。

新生ナイトラビットは瞬く間に人気を集め、かつてのナイトラビットのファンと、その子供世代にも喜ばれている。

実際に演じている3人が先代の子供であるというのも往年のファンにすんなりと受け入れられた理由かもしれない。シャイニングラビッツを演じていた椎名フィオレッタの実の息子と娘である双子たち。そして秘密にされているが、ナイトラビッツを演じていた小園内ミナの娘である真希鳴にもその面影は色濃く出ている。

ラ・ビットはアイドルとしての人気もうなぎ登りで、早くも国民的アイドルと言われるほどに急速に成長する。やがて、最初は敬遠していた歌手デビューも果たすことになる。

そのデビューを華々しく飾ることになった場所が、同じく華々しくオープンを飾る巨大都市型テーマパークビル、ルミナス・タワー。その屋上の特設会場でのコンサート。

3人は特撮ヒーローショーでのステージ経験はあったが、歌手としては初めてのステージ。それなのに、想像以上の大きな会場で失敗の許されない記念式典でもある。どうなることかと思っただけ、いつも以上に艶やかで笑顔を輝かせた少女たちは、抜群のチームワークを魅せてくれた。

記念すべきステージを見事に飾ったアイドルたちは、休む間もなく次なる仕事へと駆り出される。

ルミナス・タワーの地下には、同じ会社が経営するミラージュランドなどを繋ぐ専用の鉄道ルミナス・トレインが走っている。

ラ・ビットはこの列車に乗り、途中イベント専用のラディアンズ・エクスプレスに乗り換えることになる。ラディアンズ・エクスプレスは、その列車自体がテーマパークとなっていて、早く移動するのではなく乗ることを楽しむ。アイドルたちは、その列車の中でイベント

を開催し、より一層、乗客を楽しませなければならぬ。

国民的美少女と超至近距離でコンタクトを取り、一緒に列車の旅を楽しむことが出来るプレミアムイベント。その内容は一切明らかにされていないが、誰もが羨む夢のようなイベントであると主催者は約束している。

第1章 衣装チェンジは満員電車で！

朝。ルミナス・タワーのスイートルームに黒いスーツ姿の青年が入って行く。大理石の床にコツコツと靴の音が響く大きな部屋には、まるで巨人のベッドかと思うほど大きなベッドが真ん中にどんと置かれており、沈み込むほど柔らかいマットと真っ白なシーツの海に、青年がマネージメントする3人のアイドルの真っ白に輝く肢体がかるうじて見えている。

アイドルとマネージャーという気の置けない間柄とはいえ、年頃の少女たちが一糸まとわぬ姿なのに若き青年マネージャー小宮九朗には遠慮がない。そして部屋中に響く大きな声で、眠りこける美少女3人を起こしにかかる。

「おっは！ 起きろ、お前らっ！ 3人とも今日も元気か？ さ、急ぐぞ、今日の仕事は時間との勝負だからな！」

そのか細く小さな肢体を投げ出すように3人は絡まり合って、シーツの海に深々と沈んでいる。西洋人の血を継いでいる双子姉妹の真っ白な肌と純和風の黒髪美少女の真っ白な肌は、それぞれ青みと赤みの差があるが、それぞれ美しく、黒髪とブロンドが絹布のように柔らかに広がり、瑞々しい肌の絡まりを縁取っている。

眠っている時は、血の繋がりもあるからか、3人とも同じようにまるで人形のような均整の取れた顔立ちで、眠り姫と化しているが、目を開け始めると、その個性豊かな性格が現れてくる。

「うるっさいなあ……さっき眠ったばっかなのにい。もうちよつと寝かせてよお……」
双子姉妹の妹ながらラ・ビットのリーダー椎名ミオは紅い瞳に意思の強さがはつきりと出ている快活な少女で、スポーツ万能の引き締まった身体に、大きくはないが形の良い微乳と可愛らしいお尻が、絶妙なバランスで備わっていて、ボーイツシユな美少女に妖しい色香を備えている。

ついこの間までは、スポーティな生活に相応しく、ボブカットですっきりとした顔立ちを目立たせていたが、今は事情があつて結んでいても膝に届くほど長いポニーテールになっている。とはいえ、快活な少女が大きな赤いリボンで結んだポニーテールを揺らしているのもまた、健康的で愛らしく見える。

「だから早く寝なきゃつてボク言ったんだよ。なのにミオちゃんと真希鳴ちゃんが……せ、せっかく終わったのに……2人で……」

ついこないだまで実は男の子だった双子の姉ミトは、急激に膨らんだ見るからにふんわりと柔らかそうな胸の膨らみを恥ずかしげに隠し、元々女の子である妹よりも段違いに女の子らしいかわいらしさをさせる。

元から女の子にしか見えなかつたしなやかな身体つきは、更に女の子らしい曲線を描き、なぜか妹よりもふっくらとしたバストだけでなく、真っ白なお尻もふっくらと柔らかかな曲線を見せていて、それでいて極度の恥ずかしがり屋なせいで異様なほどか弱い美少女に見える。

だが、世間的に男の娘として知られている手前、デビューコンサートでは急遽、ミトとミオは入れ替わることになり、大事にしてきた長い髪をバツサリ切り落とし、快活な妹っぽく

見せるためにボブカットになってしまった。そのせいでむき出しになったか細いうなじが見られるのもまだ慣れておらず、恥ずかしく思っている。

「わ、私っ？ ミオはともかく私までですか？ ああ、もう……夢中になると私、なんかおかしくなっちゃうみたいで……でも、ミトさんだつて……」

2人とは従姉に当たる真希鳴は、母親譲りの艶やかな長い黒髪の純和風正統派と真ん中の美少女。かつて清純派美少女として絶大な人気を誇っていた国民的アイドルの娘なのだから当然だろう。

母親と似ていないのは3人の中で一番豊満な胸だろう。ミトも妹に怒られるほど大きな胸に成長したが、真希鳴の美巨乳はサイズも張りも形も作り物かと疑いたくなるほど完璧であり、別格なのだ。とはいえ、腕や脚には余分な脂肪もなく、すらりとしなやかに伸びていて、一番大人びた身体つきをしている。

性格的にも強気ではあるが落ち着いていて、振る舞いはあくまでしとやか。すつと通った目鼻立ちもいかにも知的なクールビューティといった感じた。

そんな3者3様のアイドルたちはねっとりとした体液に塗れた裸体をゆつくりと起こし、お互いの身体を見合つて夢中になっていた昨夜のことを思い起こしてしまい、深くため息をつく。

「まあまあ、あれも仕事だし、仕事に精出してくれるのはマネージャーとしてありがたいことなんだけどね。だからつて他の仕事に影響が出ちゃプロ失格なんだぜ」

朝から快活なマネージャーに急かされ、ベッドから起きた少女たちはふらふらとバスル―

ムへ向かう。朝早く出発しなければならぬのに、昨夜はミーティングの後にもまだ仕事があったのだ。特別なファンを招いての営業活動。決して知られることのない、彼女たちの裏の姿。

「なんだよ、あいつ。自分でやらせといてさ……」

「ふてくされてる割りには、あなたが一番愉しんでいたようですけど?」

「はあ? あんただって相手が勘弁してくれって言うまで……」

「どっちもどっちだよ……2人のせいでボクまで……」

「ミト姉ちゃんはイヤなフリしてるだけじゃんっ! ほら、洗ってるだけなのに……」

「ちよ、や、止めてよ、ミオちゃんっ!」

裏の仕事が終わってからも、朝方まで愛し合っていた3人。それでも体質的にタフな少女たちはお互いの身体を石けんの泡で包み込み、手の平で優しく洗い合ってはしゃいでしまう。ドロドロとした体液を洗い落とすのももう手慣れたものだ。まだ数えるほどしか経験してないが、少女たちは既にその仕事にのめり込みつつある。いや、飲み込まれつつある。

考える暇も与えられず、その異常さを3人で分かち合っていることで、正常な判断ができなくなっているのだが、ふとしたきっかけで判断力が戻れば、少女たちはその心を容赦なく砕かれてしまうだろう。それほどまでに彼女たちの身体にはおぞましい汚れが染み付くまで、念入りに調教されている。きらびやかなテーマパークの中で、絶世の美少女3人は悦楽の悪夢に取り憑かれているのだ。

バスルームを出た少女たちは、用意された衣装を身に付けていく。真っ白なブラウスは素肌に心地いいのだが、薄手の生地からは薄らと桜色の愛らしい乳輪が透けてしまっている。

赤、緑、白のテーマカラーに沿ったチェック柄のネクタイを結び、同じチェック柄のプリーツスカート、黒いハイソックスを履き、濃紺の2つボタンジャケットをぴしっと着込む。

「いいじゃん。来年にはそういう制服を着るんだろうけど、一足早くって感じだな」

「まあ、あの衣装よりはマシかな……」

「あれで移動するのは恥ずかしいもんね」

「これだって恥ずかしいですよ。ち、乳首が……擦れて……ミ、ミオはいいですよ、小さいからっ！」

「は？ そういうこと言うんだ？ そういう嫌みな悪い子にはお仕置きだなっ！」

そういつて紅い瞳の少女が黒髪少女の豊乳を揉みしだく。元少年のブロンド美少女は赤面しながら朝食のサンドイッチを食べている。

「つつても、すぐイベント用の列車に乗り換えるからな、移動中に着替えを済ませてもらうことになるぞ」

ぎよつとする3人。そんな話は聞いていなかったが、抗議する意味などない。どうせわざと説明しなかったのだから。

高速エレベーターで地下に降りていくアイドルたちはこれから起きることに憶測を巡らす。が、どうせ少女たちの予想を上回る、いや下回るくらいでもないことが起きるのだろう。

本当なら、地下から発車するルミナス・トレインに乗ってミラージュランドに移動して、そこでコスチュームに着替える予定だった。移動中に着替える予定ではなかったし、そもそも着替えられるわけがないのだ。

ホームに着いた美少女3人を待ち受けていたのは、ぎゅう詰め満員列車なのだから。平日でも大勢の入場者で賑わう郊外のミラージュランドと都内のルミナスタワー。それを短時間で行き交う無料専用列車ルミナス・トレインは常に満員状態で有名なのだ。

「クロちゃん……マジで、これに乗れっての？」

「ん？ ああ、まあ」

「まあ、じゃないでしょう、お父様……じゃないっ！ クロウー！」

呆然とする双子をよそに激昂する真希鳴。普段は大人しいが、実の父親にだけは烈火のよう怒る。血の繋がった実の父親が、自分も含めて大切なタレントであるはずのラ・ビットを玩具のごとく扱うのが許せないのだ。弄んでいるとしか思えないのだから。

いや、タレントではないのだから当然だろう。本名、クロウ・ゾディアックは、ナイトメアことシルバー！ ゾディアックの息子であり、同じ息子である拓海とは違って、忠実に父の意志を継ぐ後継者なのだ。だから、彼はマネージャー小宮九朗を仮の姿として、ラ・ビットをテーマパークに誘い、自分の娘をも陵辱の餌食とした。

「しょうがねえじゃん。ラディアンズ・エクスプレスに乗り換える駅まではこれで行くしかないんだからさ」

ラディアンズ・エクスプレスは走るテーマパークとも呼ばれる特別な列車で、ルミナス・

タワーとミラージランドを行き来するためのルミナス・トレインとは終着駅は同じでも、乗車目的と走るコースが全く違う。その車体の大きさもあって、線路そのものが違うのだ。そのせいもあって、工事途中のルミナス・タワーの駅にはまだラディアンズ・エクスプレスが乗り入れ出来ないため、別の駅まで一旦移動しなければならぬ。そのためもあって、ルミナス・タワーから乗り換え駅までの区間はまるでラッシュアワーの通勤電車のように混雑している。

それを知っていたからラ・ビットの3人は移動中に着替えるというクロウの言葉に動揺したのだ。そして、実際その混雑を目の当たりにして少女たちは気が遠くなりそうなほど狼狽している。

「時間ないぞ。次の電車に乗ってくれ。衣装は中に用意されてる。ミオは1号車、ミトは2号車、真希鳴は3号車な。ちゃんと着くまでに着替えるよ」

ときばきと指示をするクロウに抗議をしている暇もない。次の列車は駅に入って来て乗客が乗り込みつつある。3人は急かされるままそれぞれの号車に駆け込んでいく。

1号車。ミオは入った瞬間、猛烈な違和感に襲われている。

「……あつつう」

異常に蒸し暑いのだ。窓ガラスはびっしりと結露に覆われ、車内が水蒸気で白く見えるほどに。おかげで車内にいる大勢の人間が漏れなくひどく汗をかいて、雨に濡れたかのように服を湿らせている。

なので混み合った車内に滑り込んだ瞬間、彼女の身体もじつとりと濡れた身体に挟まれてミオの制服も濡れつつある。

しかも、ミオの女性化による乳房の発達を誤魔化すため、残念なことに元々女の子でありながら貧乳なミオが、世間的に男の娘と思われている姉のフリをしているのだが、この双子姉妹は髪の長さが最大の特徴でもあった。それも男であるミオの方が長くてキレイな髪を持つていたのだ。だから、ミオはわざわざエクステを着けて髪を長く見せている。

バイオ・ケミカルから機械工学にまで異様な天才的能力を見せるマッド・サイエンティストのドクター・ペオニーがミオの髪を元に作った高性能のエクステはほとんど地毛と融合して違和感などないほどとはいえ、たださえ鬱陶しい長髪は、この蒸し暑い車内では拷問に等しい。彼女のイメーヅカラーである赤の大きなリボンでポニーテールにしても、軽さを好む彼女には暑苦しいのだ。

窮屈な首もとのリボンを解き、ついでに胸元のボタンを外して少しでも涼しくしようとす。分厚いブレザーのジャケットも脱いで腰に巻き付ける。それでも滴る汗は止まらず、剥き出しになったほっすらとしたうなじにも、微乳とはいえ形よく膨らんだ愛らしい胸元にも健康的な汗の雫が浮き上がって、伝い落ちていく。

「ちよ、ちよっと、通して、通してよお」

ぎゅう詰めの中車の奥に衣装が置かれているはず。そこを目指して懸命に進む少女は、普段から自分がアイドルであることの意識というか、他人の視線への意識が低いせいで自分に集まる視線に中々気付かない。

とはいえ、そんな鈍感なアイドルでもさすがにこのテーマパークで乗せられた異様な車内の異常さに気付くのにそう時間はかからなかった。

「あの……ちょっと、開けてもらえるかな？」

混み合った車内にいるのは男だけ。言えば通してくれるのだが、あからさまに彼らは少女の方を向いて立っている。普通なら背中を向けている人間がいるはずだ。だが少女は常に向かい合う男たちの間を通らされている。その度に、彼らの濡れた衣服と擦れ合い、その肥肉の感触と生温かさを味わわされる。

しかも、ただでさえ暑い車内なのに、更に熱い息が上から吹きかけられている気がする。背の低いブロンドポニーテールの少女は、大人の男たちに囲まれるとその湿った胸元に顔を挟まれるほどののだが、通り過ぎる度に剥き出しのうなじに息がかかり、耳元をぬるい吐息で撫でられる。

だが、男たちの手が触れてくることはない。じつとりと湿った身体同士が触れて、擦れ合っても、「触られている」わけではない。

普段、自転車で通学していて満員電車に乗ることなどなかったから、当然のことながら痴漢など会ったこともないし、他人の視線を気にしない彼女は自分が痴漢されるという意識すら低い。とはいえ、痴漢というのは、こっそりと「触ってくる」ものだという認識はある。

それに、タワー・オブ・ナイトメアという悦楽のテーマパークで散々媚肉を弄ばれた少女は、もつと直接的な恥辱を受ける覚悟をしていた。だから、この車内の状況は異常ではあっても拍子抜けしてしまうところもあるのだ。

(ぎ、残念がつてるみたいじゃん、これじゃ。よくわかんないけど、何にもされないなら、その方がいいじゃん。ラッキー、ラッキー)

そう思い直し、少女は汗だくになりながら、車内にあるはずの衣装を探す。だが、既に身体中は自分と他人の汗でべつとりと濡れている。普段、真っ白なブラウスなど着ない少女は、ふと目の前の男の視線を追って自分の身体を見て、瞬間、顔が沸騰しそうなほど熱くなる。

(う、嘘! な、何これ? こ、こんな、す、透けちゃうの!?)

真っ白なブラウスは雨に濡れたようにべつとりと濡れ、少女の白い肌に張り付いていて、ほとんど透明なくらいに透けている。そして、被虐のアイドルたちは下着を着けることを許されていない。つまり、慎ましい膨らみと愛らしい桜色の乳突起が男たちの視線にほぼ完全に晒されていたのだ。

「う、そ……ちよ、やだ、やだよ、な、何見てんの!」

慌てて胸元を覆い隠してみるが、既に車内の視線を散々に浴びていた。ちいさなおっぱいを曝け出して、男たちと汗に濡れた身体を擦れ合わせていたのだ。そう思うと、少女は急に自分の肌を覆う感触に怖気を感じてしまう。

唾液やもつと濁った体液とは違うが、間違いなく男たちの身体から染み出したものが、自分の肌に張り付き、更には皮膚に染み込んでくる気がする。逆に、自分の汗が男たちの身体に吸い取られているのが、まるで自分が彼らの肌を舐め回したかのように思えるし、そう思われているという被害妄想が急に膨らんでくる。

(ち、違う! そんなんじゃないから! よ、余計なこと考えちゃダメだよ!)

自分に言い聞かせながら、車内を進む。次第にびっしりと濡れた衣服がぬちゃっと濡れた音まで出し始める。汗で濡れた剥き出しの太腿に男の硬い突起が当たった気がする。

(ちよつと、やめろよ……こ、こんな……触ってはこないのに、い、いやらしいこと考えてるんだ、こいつら！)

気付けばむせ返るような汗の臭いの中に、初心な少女がこの数日の間に擦り込まれ続けた雄の精臭が混ざっている。蒸れた股間の臭いが立ち込めているのだ。まるで気化した精子を吸い込まされているような気分だ。

(つて、アタシ……これじゃまるで……)

鼻腔を通じて気管から、内臓から犯されている。そんなおぞましいことすら脳をよぎる。鼻から、口から否応なく入ってくる汗の臭い、息の臭い、体臭。衣服越しにしか触れ合っていないのに、まるで触れもせず唇を奪われ、舌を、口腔を、鼻腔を舐め回され、濡れ透ける乳房を舐められ、スカートの中まで侵入されているような気分。

(そ、それに、このみんな濡れてるのが……)

お互い湿った身体で擦れ合うと、互いを舐め合っているような気がしてしまうのだ。あるいは、汗まみれになってまで身体を重ねて交歓していた昨夜のことをまざまざと思い出してしまう。

それに、アイドルであることを気付かれていなくても、自分のような女の子がこの状況でそんな妄想を拡げているなどとは思われていないであろうという背徳感が鎌首をもたげ、少女を後ろめたく昂らせる。

(アタシが……スカートの中も下着着けてないなんて……だ、誰も思っていないんだろな。アタシが、もういっぱいエッチなことした、いやらしい子なんて、誰も………)

男たちに欲望の視線を向けられるのよりも、自分の後ろ暗さが見抜かれる方が少女にとってはよほどおぞましく、恐ろしい。それを思うと、胸の奥で奇妙な疼きが芽生えるのも気持ち悪い。男の子に興味はなかったし、今でも他人からはそう見えていると思っ込んでいるから、自分がとくに男を知り、穴という穴で味わったことを秘めているのが、どす黒い昂ぶりを生み出すのだ。

車両の真ん中に到達した少女が、急に蒸し暑い圧迫感から解放されると、状況は一変してしまう。男たちが困む中、天井から吊るされた衣装、そして濡れて透けた制服だけを素肌の上に着ている自分。それだけでも晒し者というべき状況なのに、少女は自らの手でそれを更に酷いものにしなければならぬ。

今更になつて、ミオは自分が電車の中で男たちが見ている真ん中で、全裸になつて羞恥のコスチュームへと着替えなければならぬことを思い出したのだ。

天井から釣り下げられたハンガーには、いつものコスチュームとは違い、タワー・オブ・ナイトメアで用意されていたボンテージのように身体を締め付け、媚態を強調する衣装が掛けられている。だが、前回のものとはまた変わっている。申し訳程度に下半身を隠していたチエックのスカートがないのだ。代わりに赤いバーニーコートに合わせた赤い網タイツがある。ホントのバーニーガールの衣装だ。

「こ、こんな、ハイレグで、へ、変なところ、いやらしい目で見られちゃっつじゃんか………」

エナメル調に光るナツパレザードで作られたロンググローブとオバーニーのロングブーツは少女のボディラインを艶かしく彩りながら、まるで拘束具のように支配されている被虐感を植え付けてくるだろう。艶やかな革のハイレグバニーコートもまた少女の身体を緊縛し、愛らしさを途端に淫靡にしてしまう。ふわふわした尻尾やチエック柄のネクタイがかわいくても、男の情欲を余計に煽るだけ。

そんな背徳のないやらしい衣装に裸になって着替えなければならぬのだ。男たちが見ている中で。そして、散々調教を受けた少女には着替ええないという選択肢が初めから考えることすら許されていない。

「や、やるしか……ないんだよ……真希鳴やミト姉ちゃんだって、今頃……」

2人の仲間も辱めに耐えているに違いない。少女は意を決して胸を覆っていた腕をほどき、スカートのフックを外す。ジッパを降ろして、ぎゅっと目を瞑ってプリーツスカートを汗まみれの床に落とす。その瞬間、剥き出しになった愛らしいお尻に熱い風が吹きかかってくる。

「ひゃうっ、な、ちよ、何してんだっ！」

慌てて振り向くと、しゃがんだ男たちの顔がお尻のすぐ側にある。

「いや、ほら、熱くて立ってるのが辛くてさあ」

「てか、お嬢ちゃん、なんでパンツ履いてないの？ 暑いから？」

にやにやと笑う男たち。その視線が最初から下着を着けていなかった下半身を舐め回してくる。そして、お尻の谷間に、太腿に、手で隠した秘園へ息が吹き寄せてくる。

「ち、ちが……ア、アタシ……ナ、ナイトラビットに……」

「へ、変身するの？ こんな電車の中で？」

「アイドルが、ノーブラノーパンで露出生着替えて……」

「変身っていうか変態じゃねえか」

最初から分かかっていて、示し合わせているに決まっているのに、まるで今気付いたように言われると、やはり少女の身体は羞恥で熱くなってしまう。端から見れば、いきなり電車に乗って来て車内で服を脱いでいる変態なのだ。

「ちがう……着替えないと、お、お仕事なんだから……だから……」

「テレビに出てる人気アイドルにそんなエロビデオみたいな仕事あるわけないじゃん」

「何これ？ どつきりなの？」

「いや、プライベートで変態っただけだろ？ 芸能人ってそういうところやっぱおかしいんだろ？」

口々に勝手なことを言い、少女を辱める。アイドルとしてテレビで見られ、有名になっていくという意識が薄いミオでも、こうやって言われると目の前がくらくらするほど恐ろしくなってしまう。彼らは小宮ミオを知っているのだ。通っている学校、好きな食べ物、趣味、特技、家族構成、もっと細かいこともネットで周知されているのを今になって思い出す。自分が絶大な知名度を持ったアイドルであることを。

だからこそ、この辱めが、自分をアイドルという決してふしだらな行為をしない存在であると知っている者たちの前で行われているという恐怖と羞恥を思い知らせる。

「いいよ、いいよ、ほら、早く脱ぎなよ。スポーツ得意だから、健康的な身体つきだねえ」
「そのお股に滴ってるのって汗なの？ それとも元氣娘のフレアラビットはこういので興奮する変態なの？」

顔を真っ赤にしながら、それでもミオは必死にブラウスのボタンを外していく。西洋人の血を引いていて普段は青白い肌が、今は羞恥で熱くなって桜色になっている。その滑らかな柔肌が周り中の視線に晒されている。

「み、見るな、よお……………い、息、かけるの、や、やめろつてばあ……………」

汗で濡れた首筋に、ブラウスの下から見えて来た肩甲骨に、剥き出しの下半身に息がかかってくる。誰も手を触れて来なくても、粘るような蒸気が少女の肢体に絡み付いて、まるでねっとり愛撫されているかのような錯覚を覚える。

「ミオちゃん、急に髪長くなったねえ。お兄ちゃんと同じくらい？」

「ポニテいいじゃん。似合ってるよ」

ひよこひよこ揺れるブロンドのポニーテールに男たちの顔がくつきそうなのほど近寄ってくる。元々兄の髪の毛だったのだから当たり前だが、今は自分の髪も同然。それを舐るように見られて、臭いを嗅がれている。まるで髪の毛が犯されているような気分が、背筋をぞくぞくとさせる。

「ほらほら、早く着替えないと駅に着いちやうよお」

「う、うるさいっ！ 関係ないだろ、あんたたちに！ み、見るなよっ！」

「勝手に脱いで勝手に着替えてんじゃん。ここは公共の場なんだ。むしろ変態アイドルの方

が捕まってもおかしくないんだぞ」

口々に勝手なことを言われながら、ミオは必死に衣装を手繰り寄せる。だが、エナメルのロングブーツを履こうとして股間に集まる視線に気付く。

(ア、アタシ……なんでブーツなんか最初に……)

脚を上げれば当然秘唇が露になってしまふ。脚を閉じて無毛のスリットを隠していたのに、着替えるためには淫猥な視線に秘部を曝け出すしかない。

「ミオちゃん、ブーツ履く前に網タイツ履かないと！」

「うう、うるさいなあ、もうっ……」

タワー・オブ・ナイトメアで散々衆人環視の中で陵辱されていても、やはり電車の中で自服を脱ぎ捨てて、淫靡な衣装に着替えるというのは羞恥に耐えない。履いたことのない網タイツを履こうと脚を上げると、まだ陰唇もめくれない秘部に容赦なく視線が集まってくる。

「み、見るなっ！ そんなとこ、やだよおっ！ みんなあっち向けてばあっ！」

羞恥に耐えながら急いで網タイツを履いたミオは、目をつむって細脚をブーツに通している。バージンを失った割れ目を覗かれると、自分が既に処女ではないことを知られる気がしてしまう。アイドルなのに、いっぱい精液を注がれたことを。

「ひゃううっ！」

汗が革に吸われ、吸い付くほどに滑らかなレザーが薄手の網タイツの上をぬるぬると滑っていく。男たちの視線と息を感じながら、その舌で一斉に舐め上げられているような錯覚を

してしまふ。

履き馴れない窮屈なブーツに脚を入れてもがいている間、網タイツ越しに曝け出された小さな秘裂に容赦なく視線が潜り込んでくる。

「み、見るなっばあ……そ、そんな、みんな……」

なんとかブーツを履くと、その上にハイレグのバニーコートを慌てて着込もうとするが、うまく着ることが出来ない。

「だ、だから、そ、そんなに見ないでっばあ……」

汗で濡れた肌がレザーに吸い付き、中々着替えられない。必死に着ようとしている間、処女を散らされた秘部も、何度も揉まれて舐め回された乳房も曝け出している。視線を感じる、その淫辱をまざまざと思ってしまうのだ。そして、そうやっていやらしい女にされた自分を見透かされるといふ恐怖も襲ってくる。

うつすらと浮き上がるあばらや背骨に息が吹きかかり、男たちが遠慮なく間近で自分の肌を舐めるように視線を擦り付けてくるのが分かる。

「ひあ、い、息……そ、そんなところ……ひゃうう！」

蒸気になった男たちの汗に包まれていると、ふつと吹きかけられる冷たい息が異様なほど敏感に感じてしまふ。それを周り中から敏感な部分にかけられている。

首筋や耳に息がかかるだけで甘い息が漏れてしまい、お尻の穴にバニーコートの上からかけられるだけで少女はびくびくと身体を震わせてしまふ。

（こ、こんな敏感に感じちゃったら……アタシが、いっぱいエッチなことしてるって……バ、

バレちゃうじゃんかあ……………)

もたもたと着替えている間に、少女の身体は男たちの息と視線で止めどなく嬲られ続ける。触られることはなくても、ねっとりとした熱気の中でまるで固形物かと思うほどの吐息が全身を襲ってくる。

「あ、脚の……力……ぬ、抜けちゃうよお……………」

なんとか着替え終わったが、窮屈な衣装を1人で着込むのは思ったより体力を使ったようで、酸素も薄いせいかわず衣装がかかっていたハンガーにぶら下がる。

すると、脱力した身体に更に容赦なく息がかかってくる。ハンガーに手首がひっかかり、座り込むこともできない状態で、まるで生け贄のように吊るされた少女。

「おお、こぶりだけどおっぱい形いいねえ。バニーコートがぴったり張り付いて、形丸分かりだよ」

「食い込んでるハイレグ、超エロイよ、ミオちゃん」

その淫靡なコスチュームをまとった愛らしいバニーアイドルの皮膚を舐め回すような、男たちの吐息。

「はう、ああ、ちよ、ダ、メえ……………ま、待って……………ア、アタシ、もう、ひう、ああん、ああっ！」

もう喘ぎ声を抑えることもできない。いやらしい身体だとバレてしまったに違いない。身体中の敏感な場所に息がかけられるたびに、少女は汗でぬめる腿を擦り合わせてしまう。

「どうしたの、フレアラビット？　なんかモジモジしてるけど？」

電車の中に、恥ずかしい音と汚らしい臭いが広がっていく。

「う、わあ。マジでしゃがったよ……………」

「ウソ、ウソウソウソっ！ やだ、見ないで、やだやだ、見ないでよおおっ！ やだあああ
あっ！ 止まれ、止まれっ！ 止まってよおおっ！」

汗でも愛蜜でもない黄色い滴りが足下に広がっていく。窮屈なレザーの隙間からぷしゅぷしゅと音を立てて吹き出す聖水の噴水。だが、お漏らし姿を晒した少女は、その羞恥によって浅ましくも快楽を覚え、全身を震わせ、視界が白く濁っていくのを感じながら、イッてしまっていた。

続きは本編でお楽しみください！

Copyright (c) 2009 @039 All rights reserved.

この作品における内容全部について、無断複写・複製・転載はお断りいたします。

URL・<http://1039r.un.bl0g90.fc2.com>